

えん わん しん
闫 琬 新

学位の種類	博士（教育情報学）		
学位記番号	教情博 第 49 号		
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条 1 項該当		
研究科・専攻	東北大学大学院教育情報学教育部（博士課程後期 3 年の課程） 教育情報学専攻		
学位論文題目	中国人留学生における大学専門科目の授業に対する満足度		
論文審査委員	(主査) 准教授 中島 平		
		教授 小嶋 秀樹	
		准教授 佐藤 克美	

〈論文内容の要旨〉

本研究では、日本のある研究大学の大学院に留学している中国人留学生を対象として、専門科目授業に関する満足度を質的および量的に調査し、その結果から授業実践の改善方法と留学生への支援策を検討する。

第 1 章では、背景として日本における中国人留学生受け入れの意義を概観している。そこでは日中のパートナーシップ、学術交流、高度人材の獲得の三視点を示し、そのいずれにおいても、留学生に対する大学院レベルの専門科目授業の果たす役割が重要であることを述べる。

第 2 章では、先行研究を日本語学習・教育および異文化適応の視点から整理し、本研究の位置付けを述べる。具体的には、留学生にとって、日本語能力、対人関係、学業達成が重要な要素であることを示す。また、先行研究の多くは、日本語教育や異文化コミュニケーションの専門プログラムなど、高度人材の育成の視点からは限られた一部の留学生を対象としており、専門科目の授業に着目したものはわずかであることを述べる。次いで研究目的と論文の構成を説明する。

第 3 章では、PAC(Personal Attitude Construct)分析により、3 名の留学生がそれぞれ持つ専門科目の授業に対するイメージを明らかにする。PAC 分析とは、あるテーマに関して個人が持つイメージを自由連

想とクラスター分析によって、被験者本人にも言語化しづらい内的世界について明らかにする手法である。次いで PAC 分析の結果から、より多くの留学生に質問紙調査するための 21 項目の質問項目を作成する。

第 4 章ではまず、第 3 章で得られた留学生が持つ授業イメージに基づいた、授業満足度の質問項目を再検討する。具体的には前章の質問項目と、世界的に有効性が多く検証されている 3 種の授業満足度の質問紙(NSS,NSSE,CEQ)を比較・分析する。結果として、学生のエンゲージメントという視点からその満足度を調査することを決定し、3 種の質問紙から 24 の質問項目を抽出し、先の留学生の 21 項目と合計して 11 グループ 45 項目の質問紙を作成する。次いで質問紙調査の方法を説明し、調査の結果を述べる。109 名の留学生から得た結果全体をまとめると、調査対象の中国人留学生の専門科目の授業における満足度は、教員の専門知識と質問への対応に関して最も高い。一方で授業内の引用事例が留学生の文化背景にも共有できることと、共同作業において日本人学生から積極的なフィードバックが得られることに関して最も低い。

第 5 章は考察である。ここでは以下の 5 点から前章の結果を分析し、授業実践の改善方法と留学生への支援策を検討する。1.良い日本人教員 2.教員の明瞭さ 3. 教員と学生のやりとり 4. 効果的なフィードバック 5.留学生の日本人学生との協働学習。1 に関して、授業中のユーモア以外の要素は高い満足度を得ており、留学生はほぼ全体として教員の質に対して非常に満足している。2.に関して、図例など教授の観点からの明瞭さは満足度が高いが、学生視点からの明瞭さに課題があり、例えば熟語・省略語の説明や事例引用の際に留学生の文化背景との適合をより考慮する必要がある。3.に関して、教員は相互のやりとりがある学習環境構築に関して、十分に重視していない可能性があり、学生に授業で発言することを勧めたり、留学生にも発言しやすいようより配慮することが望まれる。4.に関して、特に課題の内容と、成績評価の理由が留学生が理解できるように伝わっているかに注意することで、留学生の学習パフォーマンスの向上と、教員・留学生間のミスマッチの軽減に役立つ。5.に関して、留学生は最も低い満足度を示しており、特に日本人学生からの積極的なフィードバック、語学力に応じた柔軟なコミュニケーション、そしてそれらを支えるための教員からの協働作業への介入が重要である。

第 6 章はまとめである。本研究の結果と先行研究におけるエンゲージメントの問題を鑑みると、中国人留学生は専門科目の授業現場に十分エンゲージメントできていないことが判った。しかし、そのエンゲージメントは高等教育の評価の重要指標である。学生のエンゲージメントの程度は学業の達成、高等教育の成功に直接関連性がある。特に、留学生のエンゲージメントは学業の達成以外でも、高度な日本語能力と異文化適応の促進に大きな役割を果たす。さらに、アカデミック日本語の熟達、友好的対人関係の構築と学業の成功を含む異文化の適応は卒業後の日本社会への定着にもつながると考えられる。それゆえに、留学生が深くエンゲージメントできるような授業現場の構築は重要な課題と考えられる。

〈 論文審査の結果の要旨 〉

この研究は、ある一つの研究大学の大学院中国人留学生を対象に、3 名の留学生の専門科目授業における困難点を見出すことを起点とし、エンゲージメントの視点から 109 名の留学生へ満足度アンケートを

実施し、その結果を分析して授業実践の改善方法と留学生への支援策を検討したものである。

従来から留学生の教育・学習に関する研究は日本語教育、異文化適応を中心として多く行われている。しかしながらその大部分は対象者が日本語学習者や異文化コミュニケーションの専門プログラム参加者に限られており、高度な専門教育を受ける留学生に関する研究は少ない。一方で日本と中国のパートナーシップ、学術交流、高度人材の獲得の観点から、大学院の中国人留学生に対する専門教育は重要な役割を持つ。それゆえに、本研究が取り上げる、留学生の専門科目授業における困難点の同定と、それを元にした授業改善方法と留学生支援の検討は、国内に類似する研究が無く、先駆的な研究として、その果たす意義は大きい。

また研究の方法として、まず少数の協力者から授業の困難点とその原因を PAC 分析を用いて深く探り、国外の有効性が検証されている授業満足度調査と比較検討して質問紙を作成し、100 名余りの協力者のアンケート結果を分析・考察するとき、再び PAC 分析で得た知見を活用するという独創性が評価される。この方法を採用したために、例えば、「ある教員が事例引用の際に「ラッコ」をキーワードして話をしたが、留学生はラッコの意味も知らず、話を聴き取れなかった」などのように、具体的で説得力のある知見が得られている。

考察においては、先行研究の効果的な教授法の知見を引用しつつ、授業実践の改善案や留学生への支援策を検討しており、実際に留学生への教育経験がある教員ならば、首肯できる妥当で実用的な検討が為されていることも評価できる。

さらに、本研究で得られた知見全体を眺めると、教員も留学生も認知主義的学習観に捉われつつも、学習者には特に、構成主義、社会構成主義的学習観の取り入れの希望とその萌芽が現れていることは興味深い。

このような独創性と実用性を有する研究であるが、いくつかの課題も残している。まず、研究における具体性と実用性の重視により、例えば質問紙の作成や、考察の一部で理論的な裏づけの確認が不十分な点が見受けられる。また、筆者自身も専門教育を受ける大学院生であることから、わずかではあるが当事者バイアスが見られる。加えて、大きな視点では本研究の結果は妥当であると判断されるが、その適用範囲が如何程かは議論されていない。

こうした課題を残しつつも、本研究で成し遂げた新たな開拓の試み、研究成果の先駆性と実用性もつ価値は大きなものがある。よって、本論文は博士（教育情報学）の学位論文として合格と認める。